



これからのさっぽろ

複数の気持ちをまとめて
活動につなげる
「思い」のマネジメントが必要です

「自分たちでできることは、自分たちの手で」と自ら活動を始めるといいます。そんな市民活動を通して、「ともに考え、行動する、自分たちのまちづくり」というものを真剣に考える時期に来ているのではないのでしょうか。
そこで、これからの市民活動はどうあるべきか、まちづくりにどうかかわっていけばいいのかを、さまざまな立場で熱心に活動している4人の方に話し合っていました。

団体の規模が大きくなるほど
リーダーの公平性、指導力、
人間性が問われます

出席者 (50音順)

伊藤 規久子さん
札幌ボランティア活動研究会所属・
札幌市市民活動促進検討委員会
公募委員

黒田 澄雄さん
地域支援クラブ会長

齋藤 達さん
札幌微助人倶楽部会長

鶴岡 美樹さん
財団法人札幌信用金庫
社会福祉基金事務局担当

札幌の市民活動は まだまだこれから

黒田 うちの会員の年齢層は二十代から七十代と幅広いのですが、三分の二が女性です。本当は、もっと男性にも参加してほしいと思っているのですが。
伊藤 女性が多いのは全体的な傾向のようですね。
齋藤 全国的に見ると、関西の活動が進んでいますね。どんどん輪が広がっているし、先駆的な活動をしている団体も多数あります。札幌は、



小さな市民活動も、横のつながりを持てば大きなまとまりになるんでないかい？

小規模でも 効果的に動けるのが 市民活動の強み

伊藤 市民活動の多くは、個人の呼び掛けなどをきっかけに、小規模な活動から始まります。私たちの会では、それをどのように発展させていったらよいかを考えるために、ボランティアに携わる方たちがグループ運営について学ぶ「グループ運営スキルアップ講座」を開いています。
黒田 確かに、活動したくても一人ではなかなか難しいし、ノウハウもないという方が多いようです。私たちは、主に地域のまちづくりに関するアドバイスや手助けをしています。平成九年以来、三十件ほどの相談を受けており、具体的には、活動を広げたいサークルのピラ作りや、町内会のイベントの手伝いなどを行っています。
鶴岡 札幌信用金庫では、昭和五十六年に社会福祉基金を発足させ、小

市民活動団体、NPOの よりよい組織づくりは

まだまだこれからですね。これまでには団体同士のネットワークなど、横のつながりが希薄だったと思います。
伊藤 確かに、関西の活動を見ると、札幌の何年か先を行っているという感じで焦ってしまいます。昭和四十年に、全国初の民間のボランティアセンターが大阪にできたこともあり、もともと市民活動が育ちやすい土壌だったのかもしれないが、やはり、阪神・淡路大震災でのボランティアの活躍が大きな契機になりましたね。
鶴岡 震災後は「ボランティアをするのは特別な人」という意識が薄れてきているように感じます。震災の二年後に起きた日本海タンカー重油流出事故では、企業が何社か連携してボランティアグループを急ぎよ組織しました。初めてボランティア活動に参加する人を含め、高校生から年配の方までたくさんの方が集まり、ボランティアに関心のある人の層が広がったのを実感しました。
齋藤 NPO法の制定も活動上の節目になりましたね。私たちは平成十一年八月にNPO法人格を取得しました。企業が母体の団体だったため、設立当初から会計制度が確立されていて、法人格の取得に当たっても事務手続き上の問題はありませんでした。ただ、個人レベルの草の根的な団体がNPO法人になろうとする場合、経理や運営の知識が足りないため、戸惑うことも多いようです。
黒田 私たちも将来NPO法人格を取得しようと思ってるんですが、今はそのための実績作りの段階です。
齋藤 現在のNPO法では、有形のメリットよりも無形のメリットが大きいかもかもしれません。公的に認められた団体ということで、透明で適正な運営をしていると見なされ、社会的信頼が得られますからね。



伊藤 規久子さん

札幌ボランティア活動研究会所属・札幌市市民活動促進検討委員会公募委員。市民の立場からのボランティアに関する調査・研究、活動グループ同士の学習会など、積極的に活動。



齋藤 達さん

札幌微助人倶楽部会長。介護や家事援助、移送サービスなどを中心とした有償ボランティアを行う。介護保険の枠を超えた、柔軟できめ細かいサービスが評判を呼び、現在の会員は約400人。